

Report | AAAS Annual Meeting: Science Without Borders

17–21 February 2011 | Washington, DC

Prepared 22 February 2011 by Yutaka Iijima



京都大学を含む**国内11機関**が、米国ワシントンDCで2月17日から5日間にわたって開催されたアメリカ科学振興協会（AAAS）年次大会に、ジャパン・パビリオンを出展しました。

AAASは世界最大の総合学術団体で、科学誌「サイエンス」を発行し、科学の発展と社会還元を目的としています。**1848年**から続いている年次大会には例年**約50ヵ国から8,000人**ほどが参加し、そのうち**約4割が研究者**です。他にも家族連れや中高生、政府関係者、報道関係者※といった多様な層が来場します。

※AAAS年次大会では、新聞社やテレビ局などの「メディア」と、企業・大学・政府機関・学会の「広報担当者」の両方を「報道関係者」として扱います。

今回は、**170を超える様々なテーマ**のシンポジウム・ワークショップに加え、組織の活動内容を紹介します。

るブース展示、家族向けの体験型イベント「ファミリー・サイエンス・デー」、高校生以上による研究ポスター発表、各分野の最新の成果や動向についての記者会見などが行われました。

ブース展示【主な対象：一般、大学関係者、政府関係者】 — 18日から3日間、企業・大学・政府機関・学会など**約120の機関**がブースを設けて事業内容を紹介しました。

科学技術振興機構（JST）の主導のもと、京都大学は、海洋研究開発機構（JAMSTEC）、慶應義塾、東海旅客鉄道（JR東海）、東京大学サステイナビリティ学連携研究機構（IR3S）、日本原子力研究開発機構（JAEA）、日本学術振興会（JSPS）、日立製作所、理化学研究所（RIKEN）、立命館大学と共同でジャパン・パビリオンを出展し、3日間で**約500名**が来場しました。

京都大学のブースでは**8枚のパネル**を掲示し、各研究を紹介するDVDを併せて上映しました。

- 大学全体+iCeMS
概要紹介
- 産官学連携本部
概要紹介
- 小久見善八 産官学連携本部 特任教授
電気自動車用電池
- 北川進 iCeMS副拠点長、工学研究科教授
多孔性金属錯体 (PCP)
- 西村いくこ 理学研究科教授
ストマジエン遺伝子
- 平尾一之 工学研究科教授
ナノフォトニクス
- 牧野圭祐 産官学連携本部長、澤山茂樹 農学研究科教授、渡辺誠也 同本部助教
バイオエタノール
- 山中伸弥iPS細胞研究所所長、iCeMS教授
人工多能性幹 (iPS) 細胞

ファミリー・サイエンス・デー【主な対象：家族連れ、中高生】— 例年は約**2,000人**が来場する、家族向け体験型イベントです。今年は19日から2日間、約**30の機関**が、科学に関するゲームや簡単な実験を出展しました。アメリカ化学会 (ACS) のブースでは、

1. 画用紙の上にシェービングクリームを乗せる
2. 好きな色のインクを選んで4滴だけその上に垂らす
3. 木の串でかき混ぜてからクリームを拭き取る
4. 画用紙にはペイントアートができ上がっている

という遊びを提供していました。なぜそうなるかを聞かれた時だけ、紙と「仲が良い」のはクリーム（油性）ではなくインク（水性）であることを数秒で簡単に説明していました。多くの子供たちは、自分で作った作品を持って帰りました。その紙の裏には「もっと科学する？」というようなキャッチコピーとともに、同学会の子供向けウェブサイトのURLが書かれていました。（写真は次ページに掲載）

①ジャパン・パビリオン ②京大ブース：映像は山中教授の研究紹介 ③京大ブース：来場者に研究内容の紹介をする古川修平 iCeMS准教授（北川進グループ） ④理研ブース：アンケートに記入する来場者（右）



特設ステージでは、約20の機関による参加型デモンストレーションがありました。米カーネギーメロン大学は「コンピューター・サイエンス・ロードショー」と題し、子供たちをステージに上げ、寸劇を通してプログラミングなどの疑似体験をさせていました。最後に、コンピューターの勉強をする事で将来どんな進路が考えられるかについて、IT系以外にも有名な企業をいくつか挙げ、収入面まで含めて紹介していました。

シンポジウム【主な対象：研究者、政府関係者】—今年の大大会テーマである「Science Without Borders (境界なき科学)」を基本コンセプトに、「脳と行動」「気候変動」「教育」「新たな科学・技術」「エネルギー」「国際連携」「人体の生命と健康」「地質と海洋」「科学の課題」「科学と社会」「安全」「サステナビリティ (持続可能性)」の**12分野・約170テーマ**がありました。個々のテーマを3~6名が異なる切り口で講演し、質疑応答を含めて1時間半~3時間で1つのシンポジウムとなります。今回「神経変性疾患における学際的・国際的アプローチの必要性」をテーマとしたシンポジウムでは、ドイツ・アメリカ・スウェーデンの研究者がアルツハイマー等

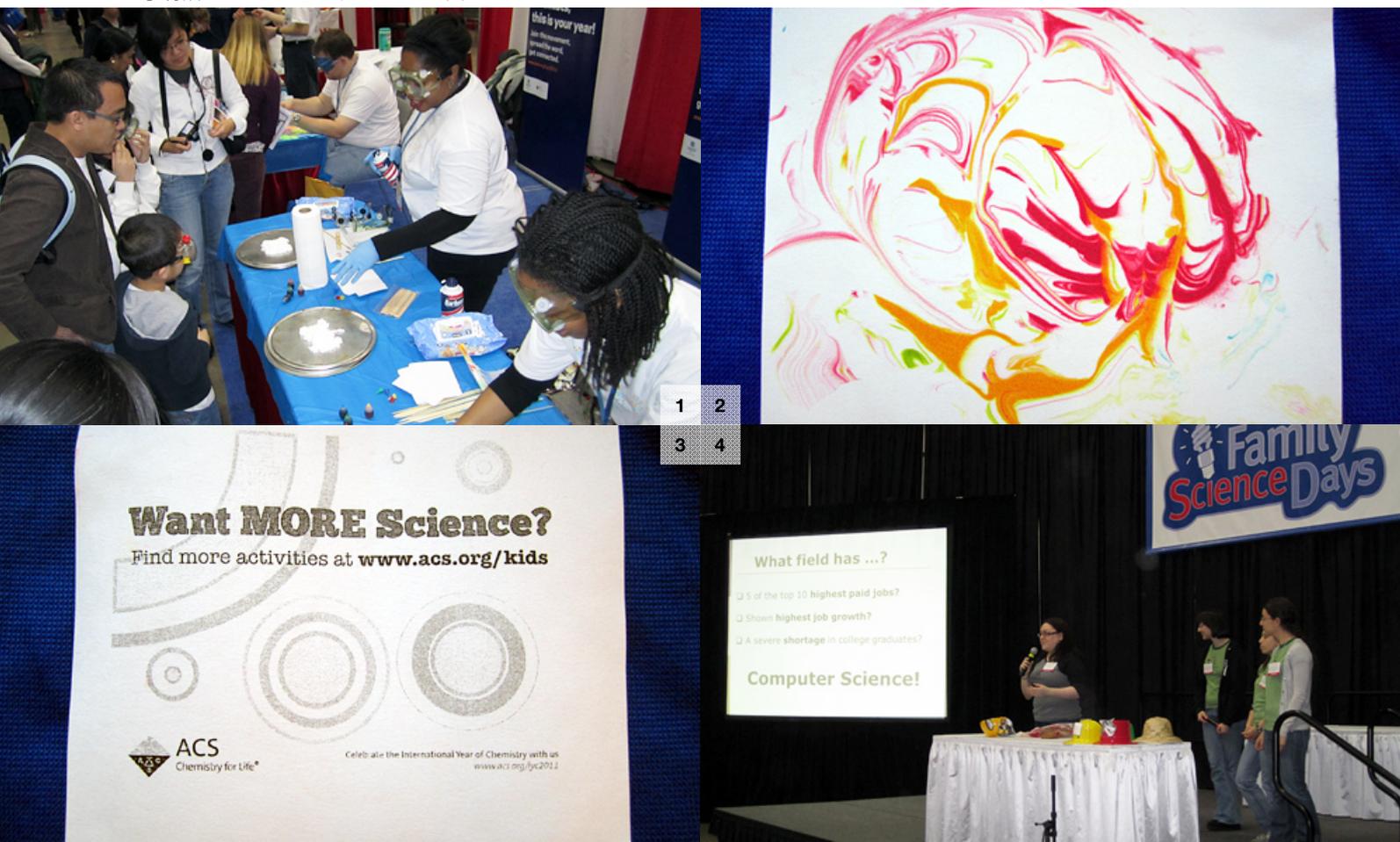
の難病について最新の知見を 発表していました。

ワークショップ【主な対象：研究者】—大学院生やポスドク (博士研究員) のキャリア形成や、社会と科学をつなぐアウトリーチ活動、政府関係者との効果的なコミュニケーション法など、実践的なテーマについて2~3名が1時間~1時間半かけ、それぞれ異なるアプローチの発表をします。シンポジウムでも質疑応答は盛んに行われますが、ワークショップではより双方向性に重点を置いています。参加者から実際に直面している課題を聞き出し、ケーススタディとして全員で共有して議論する局面もありました。

ポスター発表【主な対象：研究者、大学生、高校生、一般】—アメリカ科学ジュニアアカデミー (AJAS) に所属する高校生、大学生・大学院生、ポスドク・研究者の**3つのカテゴリー**に分かれ、それぞれの研究内容をポスターで説明します。AAAS年次大会で発表をする事ができるポスターは、高校生の部ではアメリカ各州のAJASで選出されたもの、その他の部では提出された中でAAASの選考委員に認められた**約6割**のものに限ります。

①~③ACSブース：実演する係員は、普段は大学で化学の講義を受け持つ教員。ボランティアで参加していた。

④ 特設ステージ：カーネギーメロン大



記者会見【報道関係者のみ】—会場内の別室で、第一線の研究者らが30分間ずつ、各分野の最新の成果や動向について発表し、質問に答えます。発表内容は同日に報道解禁となるため、すぐに記事になる事も少なくありません。今回、米マサチューセッツ工科大学 (MIT) と米イェール大学の研究者らによる、エネルギー政策におけるレアアース等の物質についての発表では、その日のうちに米紙ニューヨーク・タイムズ、米紙ワシントン・ポスト、米誌タイム、英科学誌ネイチャーなどが記事にしました。

報道関係者（メディアと広報）の交流を促進し、活動を奨励する事にも力を入れています。AAAS会長らとの朝食会、インターナショナル・リポーターズ・レセプション、AAAS科学記者フェロウシップ、カブリ財団による科学ジャーナリズム賞など、多くの機会と場があります。「科学を伝える」人々に焦点を当てる事で、より「科学が伝わる」ようにするための、一つの努力なのかもしれません。

京都大学iCeMS国際広報セクションリーダー 飯島由多加

①シンポジウム／ワークショップ ②ポスター発表 ③記者会見場 ④AAAS会長らとの朝食会 ⑤次年度バンクーバー大会の予告
⑥アメリカ物理学会のタワнда・ジョンソン報道官（左）。飯島の大学院でのクラスメートでもある。会場で偶然遭遇。



1 2
3 4



5 6

